展勝地風土記

Vol.27

平成31年4月26日

展勝地開園100周年記念事業準備委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課☎72－8279

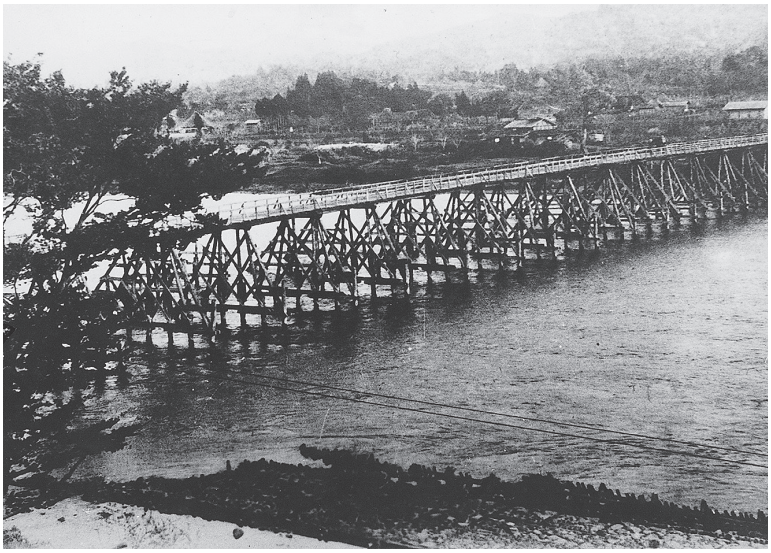
展勝地開園100周年記念事業準備委員会で、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史的なこと、地理的なこと、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。次回は7月26日に発行します。

『珊瑚橋ものがたり』

立花史談会 会長　阿部　剛（つよし）

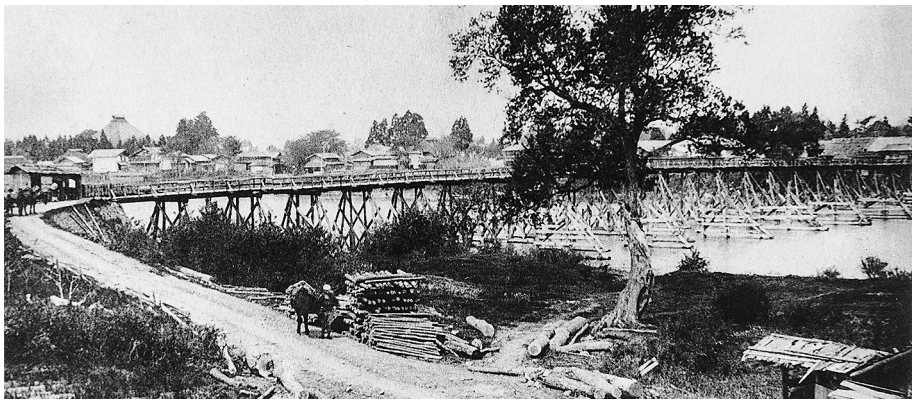
北上川に架かる珊瑚橋は四季を通じて優美な姿が北上市のシンボルとして親しまれている。

珊瑚橋の上流30ｍ付近に渇水期になると杭頭が列してみることができる。これは明治時代に架けられた旧珊瑚橋の橋杭の跡である。その当時、立花地区の人たちは黒沢尻に経済、文化など多岐にわたり生活に関わることが多かった。特に明治24年4月に起きた川岸大火（川岸80戸、立花47戸の住宅焼失）の時には、立花から川岸へ消火に駆け付けた人たちは乗ってきた舟が燃え、飛び火による猛火に包まれる立花に帰れない（耐え切れず泳いで渡った人もいた）という悲惨な事件などもあり、渡し船での川越へは深刻な障がいになっていた。こうしたさまざまな状況を打開しようと立花の住人、高舘徳次郎（とくじろう）、鬼柳惣次郎らが中心となって組合を組織し、木造の橋をつくる計画を進めていた。幸いにも黒沢尻町長の阿部忠五郎（ちゅうごろう）や川岸の人たちの協力も得られ、工事を着工する運びとなった。高舘徳次郎は率先して先祖伝来の「松」の古木（約１５００石）を切り出すなど精力的に取り組んだ。工事現場からは毎日のように「土突き唄」の掛け声が聞こえたという。橋ができると「泥棒」「物貰い」が町から立花に入ってくるとか、渡し船の人たちが仕事が無くなるなどの問題も抱えながらも1年半の期間をかけて、明治41年10月、延長２００間（３６０ｍ）幅2間（３・６ｍ）の見事な橋が完成した。北上川に架かる橋としては県内6番目という偉業であった。開通当日は大勢の人々の歓呼の中、渡り初めを行い橋の完成を祝った。橋の名前も東に見える珊瑚岳にちなんで珊瑚橋と命名された。当時は人は1銭、馬（人含む）2銭と通行は有料であった。しかし、翌年の洪水により橋は流され大損害を受け、更に明治43年には修復したばかりのところに再度の大洪水があり、上流で流された橋の残骸の



明治41年、現珊瑚橋上流30mに木橋珊瑚橋が川岸～立花を結ぶ

衝突により全てが流されるという壊滅的な被害を受けた。再建は難しい状況に追い込まれたうえ、高舘徳次郎は初志貫徹の決意のもとに全財産を注ぎ込み再建と修復を行ったため財産を失い、この事業から身を引くこととなった。しかし、この橋に込める必要性は住民の願いでもあり、


現市民球場付近より川岸方面を望む料金所、染黒寺の大屋根なども望見できる

立花地区の有志や黒沢尻町長はじめ多くの人達の熱意により、高舘徳次郎らの意思を引き継ぎ、黒沢尻町と立花地区および東部地区住民に経済、人的交流など計り知れない効果をもたらした。その後、度重なる洪水被害で管理や経費など、組合による運営には限界があり、岩手県に橋の移管を申請したところ、交通の重要性が認められ県道となり、通行も無料となって通行量も増えた。そしてゲルバートラス式の近代的な鉄骨の橋が建設され、昭和8年当時としてはモダンな県内有数の名橋となった。橋の開通に伴い、旧国道107号線指定の基となり橋の付近一帯は桜の名所展勝地を含め市立公園が整備され、市民の憩いの場となっている。高舘徳次郎はじめ多くの人達の郷土の発展を願い、北上川に橋を架けるという難工事を強い意志をもって成し遂げた先人に敬意を表したい。

なお、昭和45年に展勝地入口にこの事業を讃える「高舘徳次郎翁の顕彰碑」が立花地区の有志により建てられている。

珊瑚橋開通式

昭和８年木橋に変わり新珊瑚橋完成間近。上流に木橋が見える